

# 埴谷雄高、 散在する組織 の中で

——『死霊』統合計画(一)——

荒木優太

## 序、分裂した二つの仕事

平野謙や本多秋五と共に雑誌『近代文学』を立ち上げ、その存続に尽力し、また、その形而上学的・宇宙論的な思考の結晶である未完の長編小説『死霊』によって戦後文学時史上での特異な価値を占め、今尚その存在感を失わない作家、埴谷雄高（明治四二年～平成九年）

彼の仕事を代表する大小説『死霊』は、埴谷の生涯をかけて書き続けられたが、しかし当初全三十章の予定で、その後、十五や十三章完結と縮小的に変更されていたにも関わらず、その小説は九章「《虚体》論 大宇宙の夢」の途中までで、埴谷の死と共に中絶してしまった。この原因は、勿論その大風呂敷とも呼ばれかねない形而上学的で難解な作品構想にあったと思われるが、それとは別に埴谷が『死霊』のアイデアを他の政治的評論に書いてしまったため、本筋である『死霊』執筆に多大な遅延をもたらしてしまったことが考えられる。これは作者埴谷自身が述べていることだ。

「この数年のあいだに私はいくつかの政治的なエッセイを書いたが、それらは、本来、すでにかなり以前に途中で停止したまままだ仕上げられていない長篇のなかの或る章で触れられるべき予定されていた謂わば副主題の副主題ともいうべき位置を占める小主題なのであった。ひとつの文学作品のなかのおさめる筈であったそれらの小主題が何故に意図された長篇のなかからはみ出して、さて単独な政治的評論として書かれたかについて大ざっぱに述べれば、或る遠近法をもったひとつのヴィジョンのなかの架空事として扱おうとしたその小主題がやがて急速に時代の一主題となり、私の嘗ての不満がまた時代の一般的不満となって、まさしくいまのいま解決さるべき現実の主題となったからであり、さらにしかも、にもかかわらず、その解決のかたちと方向が私の不満をなおいささか誘ったからである」（「政治の周辺」/『群像』昭三四・五）

「途中で停止したまままだ仕上げられていない長篇」とは『死霊』を指す。『死霊』は敗戦直後の昭和二〇年一月の『近代文学』から連載を開始し、翌年、一章から三章までを含めた第巻が刊行されている。ここまでは順調だったものの、しかしそれ以後、昭和二四年の十一月からこの連載が中断され、埴谷は自身が述べている闘病生活に入り、執筆が再開したのは昭和四〇年からだった。そして問題になるのが、その中断期間だ。その期間中にソビエト連邦の最高指導者スターリンが死亡し、第一書記ニキータ・フルシチョフが批判を展開することで促されたスターリニズムの反省の渦中、論争を巻き起こした評論「永久革命者の悲哀」（昭三一・五）を皮切りに埴谷はレーニン＝スターリン批判を中心主題とした政治的評論を多く発表してしまった。それらは例えば、「指導者の死滅」（昭三三・七）や「政治のなかの死」（昭三三・一一）、「革命の意味」（昭三四・一一）等の評論文であり、これらは政治的評論文集『幻視のなかの政治』として刊行され、話題を呼んだ。

それら評論内容の詳細は後述に回すが、本来は『死霊』本体に組み入れる筈であった政治論的アイデアは作家の事情によって、分離し独立的な位置をもってしまったことに、『死霊』完成の夢を妨げた大きな要因があるといっている。この歴史的背景に即しながら、大久保典夫は次のように埴谷の仕事をまとめている。

「おおざっぱに言って、埴谷雄高の文学活動の方向は、存在論と政治論と二つに分化してゆくが、わたしの考えでは、前者は獄中体験とつよくかわり、後者が農民運動の「裏の組織」にいた体験に発しているといっている」（註一）

埴谷は二十歳前半から共産黨員として非合法の地下活動に従事し、昭和七年、逮捕され豊多摩刑務所に送られ、そこで所謂転向を果たす。『死霊』構想もその時代に行なわれており、政治思想が転回した「獄中体験」こそが、『死霊』で展開される存在論の母胎であると考えられる。つまり、政治論と存在論の仕事の二分法は、それぞれ『死霊』と『幻視のなかの政治』という具体的な作品に対応していると解釈することが

できる。大久保の他にも、例えば埴谷の政治の限界から文学への転向を分析した鶴見俊輔の古典的エッセイ「虚無主義の形成 埴谷雄高」(『共同研究 転向 上』収、平凡社、昭三四・一)や、政治的問題を括弧がけし「存在」のテーマを抽出・分析した鹿島徹『埴谷雄高と存在論』(平凡社、平一二・一〇)などの仕事にはその二分法が自明視、前提視されている。

しかしよくよく考えてみれば、その二つの仕事は同じ一つのワーク(仕事=作品)の中に回収され、統合されるべきものであった筈だ。遠丸立がいうように埴谷の「政治論文は単なる政治論文にとどまるのではない。それは『死霊』という未完の長篇小説にとって不可欠の一分枝の、不可欠であるがゆえのやむをえざる、変造という意味をもっている」のだ(註二)。先行する研究でしばしば見受けられる、政治論的側面と存在論的側面の乖離。しかし、この乖離は少なくとも構想段階では必然ではなかった。「過誤の存在史」を夢想した埴谷雄高ならこの分離経過を過誤の作品史とでも名付けるかもしれない。言い換えるならば、実現はしなかったが正統であった筈の歴史を、与えられたテキストから再構想する資格を我々はもっている。つまり、分裂しなかった『死霊』とはどのようなものなのか、という問いを立てることができるのだ。

政治論的 本稿では政治問題の中心が組織問題となるため、組織論的という語で代用している。問題と存在論的問題を乖離を統合する手がかりを作るために、本稿では『死霊』を中心として幾つかの政治的評論を参考参照しながら、埴谷雄高の組織論の再構成を試みる。この組織論はやがて書かれるであろう埴谷雄高の存在論(『死霊』統合計画)と親密な関係をもつことになる。予告的にいえば、両領域は抽象的な手続きを経ることによって、同型的な論理を潜在的に有していることを発見でき、埴谷が経験的に培ってきた組織論が存在論へ転回していく論理の素地となるような連続地帯がそこに認められるのだ。本稿ではその前編をなす組織に焦点をあてて論じていく。

本稿の鍵語は散在という組織形態の動的様相を指す言葉である。この語は後編となるべき『死霊』統合計画でも重要な語となるだろう。『死霊』の組織の成員は広域に散在しており、例えば互いの面識がないまま同一組織への所属を可能にしている。このような状況から産み出される成員への様々な効果は『死霊』根幹のテーマ、例えばリンチの問題に対して無視できない影響を与えている。散在成員の獲得、その具体的組織化、組織の監視維持という道程に従ってその機能を以下分析していこう。

## 一、下位成員の獲得 密室のなかの指導者

「僕が或る貧しい地方へ組織者〔オルガナイザア〕として派遣されたとき、一人の百姓に汽車のなかで会ったんです。その百姓はもう六十を越えてもまだ野良仕事をしていて節くれだった指先きをしている素朴な老人だったが、僕に声をひそめてこういうんです。非常に素晴らしい組織者がこの地方に来ている、と。勿論僕は素知らぬ顔でそいつはどんなに素晴らしい奴かと即座に訊き返しましたよ。そんなに素晴らしいやつっていったいどんな顔をしたやつなんだろう、と。すると、その素朴そうな老人は何処かにしまってあった大切なことでも打ち明けるように子供っぽく片目をつぶってみせてこう云った。わしもまだ会ったらんがそのひとは中央委員会なそうな……。そう声をひそめて大事そうに云ったんです。膝を乗り出したこちらの耳許へ殆んど口をつけながらね。あつは、貴方にはこの話もっている素朴な意味が解りますか？」（『死霊』四章）

これは『死霊』のなかで道化的役割を与えられている首猛夫が、主人公三輪与志のフィアンセの父で警視總監の津田康造と扇形の橋の近くで会話している場面での科白だ。首はかつて非合法の黨員として暗躍し、それを津田に逮捕され、やっと出所してきた後に再会を果たす。『死霊』という小説は共産党非合法時代の党活動に大きな背景を構えており、首はその「組織者〔オルガナイザア〕」として作中、眠る間もなく活動している。

ただし、釈放後の首は、もう組織の為に革命を目指すことはない。彼は「一人狼」を自称し、たった一人で行なう革命を実践しようとする。首猛夫という登場人物は、普段寡黙で家のなかに引きも籠っていることの多い『死霊』の男たちのなかでは、異彩を放つ性格と行動力をもっている。

さて、その首が問う「素朴な意味」とは一体何を指しているのだろうか。重要なことは二つある。第一には偶然会った「地方」の「野良仕事をしていて節くれだった指先きをしている素朴な老人」にさえ、組織活動の波及効果が認められ、その広域的な広報が十分に機能しているということ。第二に、第一の当然の帰結であるかのように、そこで権力を占有していると考えられている上位者（ここでは「中央委員会」）は脱人稱化され、その個々具体の顔貌が欠けていてもいるから？ 権力性は維持されており、上位者は抽象的な審級と化してしまっているということだ。そのため、当の「組織者」が目の前に現われているにも関わらず、一情報に等しい上位者の幻想だけにしか対応できない「素朴な老人」は彼に謎の「組織者」の到来を語るのだ。

埴谷は評論「指導者の死滅」（昭三三・七）、「政治のなかの死」（昭和三三・一一）、「敵と味方」（昭和三四・二）などから始まって政治が上位下位の「階級対立」を作り出すこと、そしてその位階制の維持が自己目的化して本来の革命達成が妨げられてしまうことを繰り返し指摘している。そこには非合法時代の埴谷の実感もあった（註三）。上位下位のヒエラルヒーに政治の本質を見る埴谷の政治観はもしかしたら現代では時代遅れに見えるかもしれない。ただ、その一面的にも見える権力メカニズムの観察には首の「素朴な意味」に関わる重大な指摘も存在している。「指導者の死滅」から引用しよう。

「ロベスピエールは、革命のなかで、「憲法の擁護者」と呼ばれる新聞を編集した。〔中略〕この時代に出現した新聞のもつ意味の重さは、その後の革命運動において量り知れないほどであった。それは思想の伝達機関として、一つの雛形から無数の複製が生れるように、被指導者のなかから急速に新しい指導者たちを生んだ。けれども、また、他方で、新聞のもたらした事態はそれだけではとどまらなかった。もし極端までおしすすめれば、大衆の前に永遠に姿を見せぬ密室のなかの指導者もまたあり得るといふ、幻想風な小説的状况もそこに設定されるばかりでなく、さらになお指導、被指導の枠を向う側へ遙かに踏み越えてしまつて、もしそこに一つの新聞があり、その読者がそれぞれ誠実な投稿者としての役目を絶えず果たせば、つ

いにひとりの指導者をもこの世界に必要としなくなってしまうという、夢の樂園に似た逆状況すら内包しているのであった」(「指導者の死滅」 / 『中央公論』昭三三・七)

フランス革命期に恐怖政治体制を作り、多くの反対派をギロチンに送ったジャコバン派の指導者、ロベスピエール。彼の権力奪取の成功はその政治的手腕によるものではなく、「新聞」というメディアを活用できたことに由来する、恰もそのように主張しているこの文章はメディアと権力の関係を探る上で極めて興味深い。埴谷によれば「新聞」の配布が、その数に応じて指導者の思想の「無数の複製」を産み出し、散在され、それらが様々な地方にいる成員(ないし成員予備軍)に受容され、新たな指導力増殖の母胎となる。この紙のなかの指導者は通常の指導者がもっているであろう身体化されたオーラや物質的なシンボル(甲冑や勲章、名誉の傷)など携えることはできないが、逆にそのような身体性から解放されているために、空間的制約を越えて、その精神が広範囲に伝播散在できる。そして、尚重要なことは、各々の「複製」の配布が充実しているのならば、紙のなかの指導者が指導者のコピー(複製)ではなく指導者自身と同等の位置を占めてしまう可能性がありうるということだ。

そこでは指導者の不在は最早問題にならず、寧ろその不在化の過程は純化された精神のみの呈示を可能にし、身体やその他余計な不純物を濾過する装置として機能する。紙のなかの指導者はやがて「永遠に姿を見せぬ密室のなかの指導者」を産む。その指導者は実体を欠いているが、それぞれの読者の精神や意識に居つくことができ、寄生することでその影響力を持続させる。言うなれば、「密室のなかの指導者」とはそれぞれの読者が行なう実体を無視した指導者権力の内面化であり、その間接的な権力発揮を広範囲に、しかも同一内容的に公布散在できること、そしてその結果成員や成員予備軍の増加を期待できることに、権力とメディアの関係の重要な側面がある。こうして、一面指導者が死滅した「夢の樂園に似た逆状況」がもたらされるが、勿論そこで指導的権力が根絶やしになったわけではない。寧ろ、指導者は実体の有無に関わらず現存し、それぞれ個々人の行動規範に内的に規制をもたらす抽象的な指導者へと変貌する。或る意味で、「夢の樂園に似た逆状況」は指導者の遍在化をもたらすともいえる筈だ。

『死霊』世界の組織活動において、どんなメディア戦略が採用されていたのかは、分からない。しかし、野良仕事をしている地方の「素朴な老人」にさえその活動が知られ指導者の権力性が維持していることや、或いは印刷工場という主要舞台の一つ(そしてそこで働き、組織活動にも関与していたと思われる首猛夫の友で異母兄弟の矢場徹吾)の存在感から、『死霊』世界の組織活動においても、紙メディア(ビラや新聞)による広報が十分機能していることが予測される。そしてそこでの帰結は、「指導者の死滅」で示されていたように紙メディアの散在的状况が作り出す抽象的な指導者の遍在をもたらす。「素朴な老人」の顔も知らない「中央委員会」への帰依はその具体的な効果の現れといえよう。

## 二、成員の組織化 位階制と他人の思考

首の設問は終らない。「素朴な老人」の挿話の次には「一人の少年」の挿話が始まる。

「僕はその頃一人の少年を連絡のために使っていた。或るとき、じめじめした霧雨が降ってそいつは連絡に出たがらないのですよ。尤も、靴がぱっくりと両側のはしまで破けているのでやっこさん部屋の隅っこで顫えているんです。やつは蒼白い顔をして斜めに僕を眺めていた。僕は近づいて行ってやつの肩へ手をかけると、こう云った。お前は連絡係だ、これからそう呼ぶことにしよう……。すると、やつはじめじめ湿った霧雨のなかへ矢庭にすっとなで行ったけ。おお、解りますか、なんといじらしい精神なんだろう！そして、なんと多くのやつらがそのいじらしい精神をいままで利用し締めつけてきたことだろう！僕にはやつらのからくりがはっきり解った。永遠の隷属を目論むそのからくりがはっきり解ってしまった。そして、僕は本来の一人狼に立ち戻ってしまったのです」(『死霊』四章)

「素朴な老人」の挿話では権力の広域化の進展過程を見ることができたが、今度の「一人の少年」の挿話では何が語られているのだろうか。それはその進展過程のなかでの中核を占める狭義の組織体には必ず上位下位のヒエラルヒーが設けられ、下位の成員は上位からの承認によって自尊心にも似た自己のアイデンティティを得てしまうということである。

これは埴谷が考える政治の基本的構造だ。評論「政治のなかの死」で簡潔に示されているように埴谷にとって「政治を政治たらしめている基本的な支柱は、第一に階級対立、第二に絶えざる現在との関係、第三に自身の知らない他のことのみに関心をもち熱烈に論ずる態度である」。第二点の現在至上主義の問題は少し文脈がずれるので脇に置くが、位階制と他人の思考のセットは組織体の維持に極めて重要な役割を果たす。そのセットが作用することで組織は個人の取り込み、個人の成員化に成功するからだ。

前者から考えてみよう。政治の位階制で埴谷がよく範例に出すのは軍隊組織での上位下位編成であるが、その巨視的構造だけを絶対視することはできない。というのも、巨視的な次元での下位構成部分も、そこを微視的に拡大してみるならば、恰もフラクタル図形のように、同一形の位階制が構成されているからだ。即ち、位階制全体は多数の位階制の集合によって構成される。

「支配者が被支配者の底辺を一定の政治への訓練して自己の防壁たらしめようとする巧妙な仕組みは、まずこの小型のピラミッドの設置にある。底辺にある一員を、たとえとりとめもないものにせよ、小ピラミッドの頂点に置いてみせることは、権力意識について一抹の共通項を味わせ、そして、同じ旗の下に相携えて進んでいるかのごとき踏み越えた錯覚をもたらすのである。このため、政治は、つねに、その最も下部に於いても、上部とまったく同様なピラミッド型式の機構をもちたがるのである」(「政治をめぐる断想」/『近代文学』昭二六・二～三)

個人を大量に集めただけでは組織は形成(組織化)されない。それは群衆に等しい。そこには個々人を越えて共有される同一性が必須であり、組織への帰属意識を個々人に組み込む必要がある。こうして個人は成員や組織者となりうる。埴谷の洞察が示しているのは、喩え組織下位の成員であっても、そこに小権力を行使できる役職を分業的に設けてやることによって、「権力意識について」の「一抹の共通項」を共有し、組織への帰属感覚を養うことができるということだ。挿話の少年においても、「連絡係」という具体的な役職を与えることで、彼は「じめじめ湿った霧雨のなかへ矢庭にすっとなで行く」「いじらしい精神」を「永続の隷属」のために躡け、調教すること。しかし、この調教を決して上位の権力者が下位者の自由を無視して暴力的に強制力を行使する方法だと解釈してはならない。帰属感覚を得た彼は自ら進んで自発的にその役職を全うしようとするのであり、自由意志を拘束することなく己の意志で組織の器官として働くからだ。「巧妙な仕組み」は個々人のアイデンティティ(自己同一性=帰属性)を支援し、同時にまた管理

することで、成員の自主的組織活動を導くことになる。

こうして、個人が組織の成員として没入していくと他人の思考が彼等を司るようになる。後者を考えてみよう。この他人の思考という表現が分かりにくければ、党派の思考と換言してもいい。埴谷は次のように言っている。

「政治は自らが感じ、見たところのものではなく、他人が見て感じたところのものの上にもみ支えられているが、ところで、そこに扱われる他人なるものがつねに見知らぬほど遠くにあるのとまったく同時に、その自身もまた新たな他人に対して見知らぬほど遠い他人の位置へまで絶えず移動しつつあるのであるから、さてここで数歩さがって、そのような私たちに支えられている政治のかたちの総体を遠望し、考察してみるならば、そこに強大な遠心力をもって廻転しつつあるひとつの巨大な渦を想定することができる。そして、そのとき、この渦の彼方にある他人の見て感じたところのものが真実であるか否かは、多くの場合、判断不可能であるので、その真実の基準は、彼が同一党派にあるか否かでたちまち決定されてしまう」(「政治のなかの死」 / 『中央公論』昭三四・二)

組織の成員はそこでアイデンティティを得ている限りで、組織(党派)を裏切るのは難しい。組織の否定は必然的に自己否定に導かれるからだ。それ故、他人との比較で偏差の出てくる自己の思考は放棄されねばならず、その空虚な思考に残るのは同調圧力の影響を直に受ける。また、自身が強いていく他人の思考であり、党派の思考となる。こうして組織の成員として没入した個人は、その個人の自尊的な自己を保守するためにこそ、割り当てられた成員性を手放せなく、自身独自の自律的な思考を明け渡さねばならない。組織の政治的力学はこのようにして個人を取り込み、思考を組織に譲り渡した成員を増やし、暴力的な強制力なしで位階制を維持することに成功するのだ。

埴谷は支配者の理想を「一方では、命令に服従する物言わぬ無意志を、他方では、その命令者を讃え擁護する楯となるべき自由意志を育てること」(「政治をめぐる断想」)だというのがこの二つは端的に矛盾しているものではなく、「自由意志」(位階的服従の自主的選択)が「無意志」(他人の思考)を補完し、また逆に「無意志」が「自由意志」を育て上げるように、共立的に相互を補佐しているのだ。

### 三、上位成員（へ）の監視 サンプルとしての首猛夫

組織の政治的力学によってどのように成員が構成増員されていくのかということは確認した。ではその具体的なサンプルとして首猛夫という一成員だった登場人物のことを考えてみよう。前段のような「からくり」を理解したという逮捕された後の首猛夫は組織の力学に対し、否を唱える。つまり、「本来の一人狼に立ち戻ってしまった」訳である。「孤独 それは政治のタブーである」「政治のなかの死」という言葉でも明らかのように、その態度は端的に、政治や組織、党派に対するアンチテーゼであるといっている。元々は組織活動に従事していた首が何故このような転回を遂行したのか、という理由は『死霊』本文中においては明示的に示されていない。しかし、首の政治的活動の経歴を検討することで、その予測を立てることは決して不可能ではない。例えば、首が検挙された直接的な原因は仲間の裏切りによるものだった。少し長い引用しよう。

「フランス風の喫茶店の内部には、七、八人の客が腰かけていたが、一斉に眼を上げてこちらを見たような気がしたんだ。すーっ、すーっ矢のように走り流れる視線が俺へ集って、何処かへ鋭くつきささったような感じだった。後で解ったことだが、その店の内部に腰かけていた客の半分以上は張りこんでいる奴等だった。なにしろ俺の連絡相手たるや既に逮捕されていて、そいつめ、この連絡場所までしらせているって始末だったんだからね。その時のやつらの指揮者は柔道四段といわれる獰猛な男で、あとで俺に手柄話をしてきかせたが、そいつはそいつなりに激しく緊張していたんだ。俺の人相は充分に知られていなかった。眼は鋭く、顔一面にそばかすがあるってのが、やつらに解った俺の人相の凡てだったのだ。その指揮官は、間違っって無関係な者を捕えてはならぬと、緊張のあまり膝が震えていたそうだよ。やつは入口の扉へ一番近い席へ腰かけていた。俺が入ってくるまで、俺かも知れぬと思いついた男が二人もあったそうだ、やつはどきんとしたそうだよ。そうかな、そうでないかな、と心臓が早鐘のように波打つ間、閃く光のように自問自答しつづけていたといったっけ。やつは、俺がやつの横側を進んでゆく姿を眺めながら、ついに、そうだと判断した。もし間違っって何ら関わりもない無辜な市民を逮捕したなら、その責任は凡て彼自身が負うと、やつなりに悲愴な決心を、そのとき、したんだ」(『死霊』三章)

この科白は首が組織の会合場所として仮借していた暗い屋根裏部屋の主人黒川健吉に再会し、彼に対して独白したものである。仲間からの密告によって確保される哀れな一成員の告白がそこにある。しかし、一読して分る通り、警察体制は首の顔を明確に識別していない。ここは重要な点である。というのも、連絡場所さえ密告してしまった仲間すらも、きちんと首を識別していない可能性があるからだ。もしその密告が首の相貌に関する仔細なデータを含むものであるならば、逮捕は極めて楽なものになるだろう。しかし、成員か否かの判別は警察体制には勿論、成員自身にも明確ではない。その為、首の逮捕に踏み切るには、ささやかな情報を頼りに自問自答しつつ、一か八かの賭けに出るしかない。

ここで疑問に登るのが、『死霊』世界における組織の成員間の紐帯はどのような形で確保されていたのかということだ。上下間の垂直的な結びつきは、抽象化した指導者や上位者の権力性への帰依によって保証されることは確認したが、横と横の水平的な結びつきは果たして存在していたのだろうか。先の例を見る限り、その結びつきは希薄であるように考えられる。特に成員の散在状況は一成員の生活圏内の外で別の成員と出会う可能性を絶望的なものにしてている。連絡者と首との関係が如何なるものであったのかということは明示されていないが、しかしその把握の希薄さから考えて、その交流は希少で、もしかしたら一回的なものでしかないのかもしれない。

このような推理が妥当であるのだとすれば、組織は上位の権力による党员全体の垂直的支配を非常に強固なものにすると同時に、党员間同士の水平的横断的交流を実質的に禁じていたのだと考えることができ



るだろう。広域に散在した成員のネットワークは実際的にはメディア等の活用によって全国に広がっている。しかし、それぞれの下位成員にとって現象的に現われる組織活動は自身の日常的な生活圏内を出ることはなく、組織の広域な全体像を把握することは難しい。まして、遠い地方の見知らぬ一成員のことなど知る由もない。こうして縦に貫く 埴谷の言葉でいうなら「ピラミッド型式」の 支配の強化は、同時に成員同士の無関心を結果的に招くことになる。或いは、より厳密にいうならば、同じ成員であるにも関わらず双方が互いに何の関心もないという奇妙な体系を組織は用意するのである。

しかし、首は単なる最下位成員というわけではなく、それなりの上位者性を有している、と考えられる。老人の挿話でも暗示されている通り、彼は「中央委員会」に入っているようであるからだ。その首にとって成員の条件は他の下位成員とは微妙に異なってくる。そしてこの問題は直接的に埴谷の政治的論文で論じられなかったものの、先に述べてきた組織の性質と合わせて考えると極めて興味深い効果をもたらしている。特筆すべきなのは、首猛夫が他の成員以上に行動的に飛び回り、交流の希薄だろう成員と成員との間をぐ中継的な役割を果たしていたと考えられるということだ。津田康造は次のように回想している。

「貴方の活動振りの記録は殆ど超人的でしたね。貴方の調書を持ってきた部下は、貴方自身の口から聞き出したことはその調書のなかに何も無いが、他から訊き出した面白い記録があるという私にいろいろ話してくれました。その記録によると、貴方は殆ど同一時間に他の場所へも現われたようになっている。貴方は身に附属する一切のものを持たずに、というのは、証拠物件となるような何物も持たずに、その記憶だけを携えて、あらゆる地方へ出没している。そう、その部下は貴方の写真を見せながら、貴方の異常な記憶力について、こんな風な噂さえあるほどだと、説明してくれましたよ。同志の名簿 つまり、仲間達の経歴、傾向、性癖、そして職場の住所をオブラートへ綿密に書いたあげく一読したのち忽ち食べてしまう珍しい組織者〔オルガナイザア〕だ、と。その部下は、貴方が一人で百人に価する男で、その異常な記憶力と努力で、仲間達に嫌われながらも、貴重な宝庫として扱われていることを、珍しい報告として知らせてくれたのです」(『死霊』二章)

首は成員の名簿に書かれている情報を記憶し、複数の成員の間を恰も時空の制約を無視するかのようになせわしく行き来する。その「超人」的な活躍によって、一面、彼は他の成員よりも広域で鳥瞰的な視点を獲得しているかに見える 詳しくは後述するが五章のリンチ事件でのスパイを見つけ出したのは他ならぬ首猛夫であり、その一点を見ても彼の組織把握が他のものと一線を画していることが仄めかされる。

しかし、それは程度問題でしかない。つまり結局組織の全体像は首でさえ把握できずにいる。というのも、その「調書」には首「自身の口から聞き出したことは」「何も無い」にも関わらず、「他から訊き出した面白い記録」が無数に書き込まれており、それは把握できないような成員の微細な裏切りや無警戒心を証拠立てているからだ。首自身の「証拠物件」が存在していなかろうが、首の行動そのものが無数の成員への観察と聞き取り等による変換によって、一種の履歴情報となって警察体制側にプロファイリングされる。そして、この瑣末な漏洩に気づけなかったから、或いはまた気づいても対処できなかったからこそ、首は逮捕の瞬間の準備を許してしまい、連絡者の連絡場所密告が決定的な一打をもたらしたのだ。

「仲間達に嫌われ」る首にとって、裏切りの条件は既に整えられていたと断言していい。首の「一人狼」は出所後に明確に打ち出されているが、その状態は実の処、首が中継的な役割を果たしていた時にも妥当している。津田家で津田康造と対話している場面から引用しよう。

「一人狼……貴方はこの下層世界の異端者を知っていますか。五色の光が輝く夜の盛り場に、鋭い、油断もない眼を光らせ歩いているそいつの姿を見たことがありますか。そいつは、佻しい、暗い影をひいている。どんな親分にも属さぬそいつは絶えざる脅威と危険に曝されているんですよ。何時どの方向から短刀〔どす〕がぐさりとくるか解らない。あらゆる場所で、そいつは見張られている。絶えざる監視の眼がそいつの背中につきまとっている。そいつらが其処らを荒らしはせぬかと、見守られているんです。そいつの生

活は静かな息すらつけぬ。素知らぬ顔付で人混みのなかを歩いていても一分の隙もない緊張を全身へかけているそいつの肩先には、何処か侘しい翳がある。そいつはそんな悲痛な影をおとしながら、何処の親分にも属さず、全国を渡り歩いているんです」(『死霊』二章)

津田康造の部下によれば首は「殆ど同一時間に他の場所」に、「あらゆる地方」に出没していた。それは他の成員にはない特権的な活動だったかもしれないが、しかし彼は組織の全体像を把握している訳でも、無論組織から自由になった訳でもない。寧ろ彼の行動範囲の広さは「絶えざる監視の眼」を醸成してしまう。というのも、彼が水平的な結びつきを欠いた成員達との出会いを数多く広い範囲で重ねれば重ねるほど、彼の行動履歴の情報の断片を漏洩させる 多くは親密な交流等をしなかったであろう他人に等しいような散在した成員に出会う可能性を高めてしまうからだ。

首は休むことなく、眠ることなく動き続ける。或いは、首は出会ったこともないような成員のデータを完全に記憶しようとする。前段のような要件を確認すれば、その「超人」的な活動力を個人的な組織への忠誠心として解釈すべきでないことが理解できるだろう。休むことができないのは、「何時どの方向から短刀〔どす〕がぐさりとくるか解らない」からで、彼は警察体制は勿論、一回しか会ったことのないような成員に密告や漏洩されるような「絶えざる脅威と危険に曝されている」。完全な記憶を欲するのは、そのような瑣末な成員でさえ自身の命取りに十分なりえてしまうからで、組織の全体を出来る限り把握することが死線を分かつからだ。

しかし、その対監視対策は更なる監視を呼ぶようなスパイラルを描いてしまう。休むことなく「監視の眼」から逃れるように「全国を渡り歩いて」いけばいくほど、危険度の高い散在した成員に出会う可能性は高くなる。そこでもがけばもがくほど、自縄自縛的に「監視の眼」が増えていく。又、成員を記憶すればするほど潜在的な裏切り者の数は単純に増加していくので、これも監視への対策にはならず、その疑心暗鬼は寧ろ強くなっていく。記憶の努力はその度合いが強まれば強まる程に、被監視への意識を強化していくのだ。

不眠は『死霊』全編を貫く重要なテーマであるが(首と共に組織に協力していた与志の兄三輪高志もまた不眠の夜を送っている)、首が全編中唯一、一休みできるのが、与志や高志の友達で同じく組織に協力し、仮釈放の後、瘋癲病院に送られてた矢場徹吾の下だったということは極めて印象的だ。というのも、矢場は周囲から「黙狂」と呼ばれ、一言も言葉を発することなく生き続けている失語症の男であり、彼の徹底された沈黙ならば首の行動を漏洩させたり、密告したりする危険がないからだ。首は瘋癲病院から矢場を盗み出し、ある地下室へ彼を隠すが、そのミステリアスな行為も自身の眠りの奪還のためには必須なものだったのかもしれない。

とにかく、このように考えてみたとき、下位成員以上に首猛夫は組織に囚われ、自由を封じられていたとっていい。その拘束力は決して身体的・物理的自由を侵さないものの、尚持続可能な拘束力だ。そこで機能しているのは抽象化した指導者ではない。抽象的であれ単数形の形態を保持していた指導者に代わって、新たに登場するのはその単数形の形態さえ無化されてしまった有象無象の成員非成員の監視の眼差しであり、それを心的に組み込まれることで、身体的自由の確保されている檻なき監獄という奇妙な世界が立ち現われる。疑心暗鬼を産む監視への意識は、抑圧されており、何処へ行っても何をしていても、彼に休むことを許さない。そして警察体制は勿論仲間である筈の成員へも彼は過敏にアンテナを張り巡らせて不断に警戒しなくてはならず、こうして世界そのものが監獄と化してしまうのだ。そして、繰り返すが、そこから逃れ出ようとして動けば動くほど、その心的に組み込まれてしまった監獄はその分だけ拡張してしまう。役職に忠実であることと、役職から逃れようとするのは、実際の行動においてそこでは差異をもたず、結果組織の有用性に回収されてしまうのだ。

それ故、監視の意識への内面化は、単なる成員の拘束というよりも、成員の更なる活動、眠ることなき不

断の組織活動を導く組織の重要な機能だといえる。こうして、彼は実質組織のセキュリティシステムとなる。自身の安全を確保するためには、いち早く異物（スパイや危険因子）を検知し、何らかの処理を果たさなくてはならない。被監視という意識は、保身のためのそれ以上の監視的役割を必然的に引き受けることとなる。生きたセキュリティシステムは事実、五章で密告者を捕獲したのだった。

埴谷雄高は指導者（支配者）の心理について次のような注意をしている。

「支配者の心理も、〔被支配者が「無意志」と「自由意志」に引き裂かれているように〕つねに、二つの相反する矛盾に裂かれている。ひとたび発言すれば、その言葉が巨大なピラミッドの底辺まで服従と畏敬の裡に拡がってゆくさまを眺める一種残酷な快感と、見渡しがたい底辺の何処かに抵抗と反乱の声が起ってはせぬかという不安である」（「政治をめぐる断想」）

首が「残酷な快感」を味わっていたかどうかは分からないが、しかし下位の、広域に散在している有象無象（「見渡しがたい底辺」）への「不安」を解除できなかったことは確かだ。こうして、組織は下位成員を抽象化した指導者によって拘束するだけでなく、それなりの上位成員に対しても権力の私有や自由を決して認めようとはしない。寧ろ上位成員の方こそ組織に逃げ場なく捕えられ、成員管理、成員監視のために酷使されるのだ。

以上のことから、出所後の首が「一人狼」を目指そうとしていた理由を予測することができる。漏洩や密告への緊張と警戒から解放されることのなかった首にとって、また実際に仲間売られたという体験を経た首にとって、たとえ組織の目的が社会革命であったにせよ、その組織そのものが自由を過度に拘束するのであってみれば、組織の構成や所属は真の革命にとって不必要なものでしかない。首にとっての真の革命とは何なのかということは 例えば「死」が鍵語であるだとか断片的なものを除外して 本文中明かされるなかった。しかし、確実にいえるのは、彼が「ピラミッド型式」の組織構築に最早興味がないだろうということであり、そこでは下位成員は勿論、多少権力をもった上位成員でさえ自由を拘束されることになるからだ。

## 四、成員の秘密排除 スパイリンチ事件

今まで述べてきたことを一旦整理しよう。

近代以降の組織活動は紙メディアの使用等によって成員の大量増員の可能性が格段に上昇した。そこでの技術が可能にしていることは、喩え組織の指導者に会ったことがなくても、地方に散在している個々人が指導者の言説に触れ、それぞれが指導者を内面化することで、広域に成員ないし成員予備軍を増員することができたということだった。そして、増員された成員たちはそれぞれ役職を与えられ、彼等は組織内の帰属性を獲得する。ここで組織は彼等の自由を認め、その自発性を引き出すような制度設計が試みられている。しかし抽象的な指導者によってヒエラルヒーを維持している組織は、下位成員同士の横の関係が不足しており、彼等をぐ中継的な役職が必要となる。複数の成員を監督観察しその伝達役を務めるその役職には一見下位成員にはないような特権が与えられているように見え、そして勿論そこでの身体的自由も確保されているのであるが、彼は組織から自由になれない。彼を抑圧するものは抽象化した指導者にとって代わって、無名記名・有象無象の監視の眼差しであり、それらによって彼は行動履歴が漏洩していくかもしれないというプレッシャーを常に意識しなくてはならないのだ。このようにして、全ては組織の有用性に回収されていく。

これまで、このような成員たちが受ける組織化への力を考察してきた。それは身体的自由を侵犯するものではなく、その対象を成員各々の意識としていた。しかし、勿論、組織は組織存続のために、成員の身体的自由を剥奪し、場合によっては殺害することもありうる。その典型例が組織を裏切った密告者を私刑する粛清であり、それは『死霊』五章「夢魔の世界」で三輪与志の兄にして当の粛清にも関与した三輪高志の口から語られる。

この五章は埴谷が衝撃を受けた共産党のスパイリンチ殺人事件をヒントにして作られている。スパイリンチ殺人事件とは昭和八年十一月二十八日に日本共産党中央委員である野呂栄太郎が検挙されたことをきっかけに同中央委員だった宮本顕治、袴田里見らが黨員小畑達夫と大泉兼蔵を査問し、その査問中に小畑が急死した事件を指す。この事件は長年の友人であった平野謙の大きな関心の対象でもあり、平野は小畑の知り合いであり、埴谷は大泉の世話をしていたこともあった。こうして平野謙はその課題を『『リンチ共産党事件』の思い出』としてまとめ、他方の埴谷は自身の大きな文学的テーマとして摂取することとなる。

そもそも『死霊』とは埴谷自身が何度も言及している通り、ドストエフスキーの名作『悪霊』へのオマージュであり、『悪霊』とはよく知られているように、革命の実現のため暗躍する秘密結社内でのリンチを扱った作品であった。ドストエフスキーはネチャーエフ事件というロシアで現実に行ったリンチ事件を小説にした。それを今度は小畑らの事件を中心に日本版『悪霊』を描くこと、これが『死霊』の基本コンセプトであった（註四）。

では、埴谷はその社会的事件を小説としてどのように描いたのだろうか。このリンチ事件が身体的な自由を拘束する暴力を行使することを前述したが、しかし、この暴力事件にしても組織が発揮している政治的力学の基礎は決して変わらない。以下の問題は先に述べた考察の一つの具体的応用である。

主要な登場人物は三人の上位成員を売った二十三歳の密告者の男、彼を捕まえた首猛夫、男が心酔していたリーフレット『自分だけでおこなう革命』を執筆し「単独派」と呼ばれている三輪高志、最年長のリーダー格「海豚」、密告者を半ば擁護するが最終的には直接手を下すことになった「一角犀」、せっかちな小男「彗星」、まとめ役の「議長」の七人だ。彼等に取り囲まれながら、密告者の男は自ら組織を裏切った理由を真の革命を目指すためと答え、自分自身に正当性があることを主張する。

「俺が達した真実とは、そこに上部があるかぎり、革命は必ず歪められ、その革命的要素をついにまるごと

失ってしまうことになるということだ。君達が必ずまずつくるのはほかならぬ『指導部』で、そこに大きな指導部、中くらいの指導部、そしてちっちゃな指導部の馬鹿げたごっちゃまぜな積み重ねがあちこちに飾り置かれると、どんな強い『階級絶滅』の金槌で叩いても決して潰れぬ堅固な上部なるものの厚い層の壁がかっちりでできあがってしまう。そして、その階級の壁はこの世のはじめから嘗てつくられたいかなる壁より厚く、堅いのだ」(『死霊』五章)

埴谷雄高の考える政治の基本的問題、位階制の集合が改めて密告者の口から語られている。前述したように、政治的組織は喩えそれが反権力や革命を標榜していても、組織に位階制が形成されるにつれて、それが自己目的化して固定化し、結果的に革命が妨げられてしまう。そこで密告者が考え出した革命への方途は単純に、「自己の上部なるものを何時とはいわずいますぐきっぱり取り除いてしまえば、革命への道へ踏み出せる」というもので、その論理から上位者の情報の漏洩、即ち密告を単独的に行なったのだ。

このような位階制と他人の思考から脱出することを試みる単独的で自律的な精神は、実の処、全く組織から自由になっていない。その「自由意志」は一個の「無意志」に支えられていた。つまり、彼の行動には一人の「指導者」の「天からの声」が介入しており、それはリーフレット『自分だけでおこなう革命』を執筆した三輪高志だったのだ。密告者は高志のリーフレットを読み、そこで書かれている「自分だけでおこなう革命」の理念に感銘して実際行為に踏み出すに至る。そして興味深いのは密告者は著者としての高志を認知しておらず、その査問中に始めて己の「指導者」を目の当たりにするということである。「議長」は次のように嘲っている。

「天からの声だって……！ 文字通りまさしくそれは上からお前の耳に耳に聞えてきたのだ。いいかな、それは、お前が全身全霊をかけて反抗して警察の手へひきわたしているほかならぬ『上部』からまさにきたもので、お前がお前のいう『階級廃絶』の一步なるものを直ちに踏み出すことになったその論議の真の起草者なるものは、誰だろう、いまのいまここにいてお前と斜めに向きあっているのだ。いいか、その愚かしい眼を開いてよく見る。赤い表紙に黒い文字で『自分だけでおこなう革命』と記した天来の讃うべき絶対叛逆の著述者なるものはお前の右斜めにいていまお前と向きあっているこの人物なのだ」(『死霊』五章)

それを聞いた密告者は「一種の《自己崩壊》の表情」をする。首猛夫の語っていた二つの挿話が複合した具体例がここにある。彼は組織から自由になるために、自主的な行動を起こす。しかし、一見自律したその行動規範は実の処、組織の上位自体から与えられたものであり、「一人の少年」がそうであったように、その仲間を売ったという結果だけを度外視すれば彼は与えられた役職へ尽力する忠実な成員と大差ないのだ。彼は知らず知らずのうちに、組織からアイデンティティ(自己同一性=帰属性)を調達している。しかも組織はそれが恰も成員自らの自主的な意志として意識することを導くような制度設計を盛り込んでおり、その巧妙さから逃れることは難しい。

そして、彼の行動を駆り立て、間接的に命令を与えていたのが出会ったこともない紙のなかの指導者、「密室のなかの指導者」であったということも重要だ。「素朴な老人」がここで反復している。紙メディアの活用によって作られた増員体制はこのようにして、水平的な成員同士の連携を欠いて尚抽象化された指導者の組み込みによる垂直的な支配の状況をもたらす。そしてその成員にとって、具体的な上位者達に反旗を翻せても、心的に組み込まれてしまった抽象的な指導者を組み外し、それを裏切ることは極めて困難であるのだ。そのことをこの密告事件は物語っている。

こうして、密告者は半ば論破された形となって、「一角犀」によって水の中へ沈められ「処理」された。成員同士の水平的紐帯が希薄であるとき、抽象化された指導者は個々人の内面のものでしかなく、それは他の成員との合意なく構成されている。この条件が密告者の悲劇(「自由意志」の非組織的展開)を生んだ訳だが、彼を具体的に処理するためには複数の同じ成員が直接手を下さなければならない。それが粛清であり、リンチである。興味深いことに、成員の間での紐帯が希薄であった組織のなかで、ここにおいて始

めて強力な紐帯が取り結ばれる。即ち秘密の共有で、罪の共同性であり、監視の相互性である。リンチを行なった彼等は司法を無視したその行為を密告されないよう互いが互いを監視していなくてはならない。密告者殺害の事件そのものを密告されないよう監視と警戒が更に強化され、再組織化されるのだ。そして勿論その秘密が密告されれば、リンチは反復され更なる監視と警戒が呼び起こされる。首の緊張と同等のものが、ここで組織を帯状に走り、不眠の夜を準備する。そして成員横断的なこの緊張が組織に凝集力を与え、その強度が高められるのだ。

## 五、埴谷雄高の組織論

---

密告という組織情報の漏洩を共同処刑という事件として処理し、それを介して更に組織の強度が高まっていくこの逆説。組織は組織のウィークポイントさえ更なる自己組織化のためのカンフル剤として活用しているかのようだ。思えば『死霊』で描かれた組織展開は非常に巧妙なものであったといっている。組織の特徴的な諸性質を復習的に列挙することで結論に代えよう。

一、抽象化した指導者。組織は紙メディアの使用などによって、大量に成員を増員する。彼等は地方に散在しており、生活圏を越えた成員同士は面識がない。その彼等が同一の所属を獲得できるのは抽象化した指導者を内面化することができたからで、この垂直的な支配体系が具体的な位階制構築の基礎となっていく。

二、位階制。組織の位階制はそれぞれの成員に役職を配分し、小権力を行使できる彼等の帰属感覚を養うことができる。ピラミッド型の体制は、フラクタル図形のように、小ピラミッドの集合によって構成されており、そこで成員は成員としてのアイデンティティを獲得する。すると、組織と自身の存在が同一化され、喩え組織が理想的な振る舞いをしていなくても、それを否定することは難しくなる。ここで他人の思考が彼等を司り、自律的な思考や行動が麻痺する。「自由意志」と「無意志」の共立だ。

三、内面化された監視。互いに面識のない散在した下位成員同士の連絡を絶やさないためには中継的な役割を果たす（多くは上位の）成員が必要となる。彼は一見鳥瞰的整体的に組織を把握しているようにみえるが、その任務を遂行していくためには「超人」的な能力が期待され、下位成員以上にその自由が拘束される。それは細かな行動情報の漏洩が不可避な任務であり、警察体制や面識の希薄な他の成員からの密告に怯え、緊張し続けなければならない。監視への意識が内面化しそれが常態化することで、彼は忠誠心の有無に関わらず休みなき活動に駆り立てられる。こうして彼は組織内に異物が混入していないか検査する実質的なセキュリティシステムの役割を果たすことになる。

四、秘密排除。監視が内面化された成員は、その「超人的」活動によって自身が密告される前に密告者を検知し捕獲する。組織の内的崩壊は事前に食い止められ、彼は複数の成員の下、粛清される。この不法的行為はその成員内の共通の秘密となって、希薄だった筈の水平的紐帯が緊張と共に結び直される。こうして、組織は崩壊の危機に際して寧ろその強度を高めていく方途を選択することができるのだ。

危機を経て尚生き延びようとする組織が『死霊』には描かれている。埴谷は転向以後このような組織打倒の夢を抱き続け、政治参加とは別の仕方で遂行される革命を生涯求め続けた。首猛夫の「一人狼」の姿勢や「死のう団」という謎の陰謀は端的にその表現であるし、また知らぬ間に指導者にされてしまった三輪高志は密告者のパンフレット解釈を「お前は『ひとの手』をかりて似非非革命を成就させようとした」と戒め、組織のカンフル剤として回収されないような「自分だけで行なう革命」を構想していた。それは約言的に言えば政治論的問題を存在論的な次元に転移させることにある。埴谷思想の鍵語「存在の革命」はその延長線上にある。ここにこそ、埴谷雄高の政治論と存在論が分化していく臨界点があり、両領域が同型の論理として共有している連続地帯の潜在が認められる。『死霊』統合計画を待て。

(註一) 大久保典夫「埴谷雄高と農民運動」 / 『国文学解釈と鑑賞』昭四七・一。

(註二) 遠丸立「埴谷雄高の政治思想」 / 『三田文学』昭和四三・一一。

(註三) 埴谷は次のように書いている。「われわれ黨員が話しているところに、ひとりの非黨員が現われると、その室内の雰囲気が一変した。〔中略〕われわれの前に坐った非黨員は装われた無関心のあいだに、時折、なにかを訴える熱烈な、痛切なまなざしをした。それは語らんとして語り得ざる焦燥のなかにこちらの精神を覗きこもうとしてひたすら身をのりだしている物言わぬ犬の狂おしい悲哀に充ちた真実な眼付を思わせた。だが、彼等は何ごともしなかつた。こちらからも何ごともしなかつた。そこには『階級の差異』があった。それを乗り越えることはタブーであつた。私がこのような心理主義的な要素を重視するのは、それが単に党と党外大衆のあいだの心理的關係を表示しているだけでなく、さながら大ピラミッドのこちら側に中ピラミッドがあるごとく、同様な關係がまた党内に及ぼせるからである。党の一機関のひとびとが話しているところにひとりの平黨員が現われると、まったく同一の現象が起つた」(「永遠革命者の悲哀」 / 『群像』昭三一・五)。

(註四)「ドストエフスキイがネチャーエフ事件によって『悪霊』を生みだしたごとくに、私達はリンチ事件によってまだ私達の『悪霊』を生みだしていないけれども、敢えて大ざっぱにいえば、平野謙の「政治と文学」論も私の『死霊』も『悪霊』の遠い延長線上にあるといえよう」(埴谷雄高「『悪霊』 私の古典」 / 『エコノミスト』昭四一・八)。

(引用は『埴谷雄高全集』(講談社)を参照したが、ただしすべて新字・新仮名とし、拗音・促音も小字表記に置き換えた。引用文中の〔〕は引用者による注記である)。



埴谷雄高、散在する組織の中で 『死霊』 統合計画 (横書き)  
<http://p.booklog.jp/book/31542>

著者：荒木優太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arishima-takeo/profile>

感想はこちらのコメントへ  
<http://p.booklog.jp/book/31542>

ブックログのpapier本棚へ入れる  
<http://booklog.jp/puboo/book/31542>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.